

竹富町西表島祖納の葬墓制－特別展関連の調査報告－

大湾ゆかり

Funeral ceremony and grave tradition of Sonai village in Iriomote Island:
the report of investigation for the special exhibition in 2015

Yukari OWAN

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第9号別刷

2016年3月30日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.9
March, 2016

竹富町西表島祖納の葬墓制 – 特別展関連の調査報告 –

大湾 ゆかり

Funeral ceremony and grave tradition of Sonai village in Iriomote Island:
the report of investigation for the special exhibition in 2015

Yukari OWAN

はじめに

現代の沖縄における死者の葬法は、ほとんどが火葬である。しかし、昭和 30 年代頃まで沖縄では風葬により死者を葬り、遺体が朽ちて骨になった頃を見計らって洗骨改葬する地域が多く残っていた。また、奄美諸島では薩摩・鹿児島の影響で風葬から土葬に変わった後も洗骨改葬が行われてきた。琉球弧の葬墓制は、こうした葬法の習俗に基づいて、死者を弔う葬送儀礼や墓などに独特の文化が築かれたと考える。

平成 27 年 9 月 25 日から 11 月 23 日まで、当館で開催した特別展「琉球弧の葬墓制－風とサンゴの弔い－」は、そのような死者の葬法に注目し、奄美から八重山諸島において営まれた多様な葬墓制を、時代や地域ごとに整理して紹介するものであった。展示会の開催にあたり、筆者は奄美から八重山諸島まで、いくつかの地域で聞き取り調査や墳墓等を踏査してまわった。その結果の一部は、展示の中で写真パネルや映像で紹介したが、多くは詳しく取りあげることができなかった。そこで、本稿では筆者が訪れた調査地のうち、現在も葬儀の一切を村の人々総出で行っているという竹富町西表島祖納の葬墓制について、調査内容を改めて整理して報告したいと思う。

1 西表島祖納の概要

竹富町西表島は、沖縄県の中では沖縄島に次いで 2 番目に大きな島である。島全体を亜熱帯の自然林が覆い、集落は南西から東側にのびる幹線道路沿いに位置する。2015 年 9 月末の人口統計¹によると、人口は 2408 名、世帯数 1306 戸となっている。島は東部と西部に分けられ、現在東部は大原、豊原、大富、

古見、美原、由布、高那の 7 集落、西部は船浦、上原、中野、住吉、浦内、祖納、干立、白浜、舟浮、崎山の 10 集落からなる。

このうち、西表島北西部の祖納は、東部の古見と共にもっとも古くからある集落である。15 世紀に沖合の外離島に出現した豪族・慶来慶田城用緒（けらいけだぐすくゆうちょ）が当地を拠点に台頭したといわれる。1500 年にオヤケアカハチの乱が鎮圧された後、首里王府より「西表首里大屋子」の官職を与えられ、西部全域を勢力下に置いた。以後 20 世紀の半ばまで、祖納は西部の中心地であった。現在の統計によると祖納の人口は 135 名、世帯数は 75 戸 [2015 年 9 月末現在] となっている。

2 祖納の葬墓制に関する先行調査

1969 年、琉球大学の民俗研究クラブは、西表島祖納部落で詳しい民俗調査を行い、『沖縄民俗』第 16 号²にその内容を報告している。その中の葬墓制の冒頭に興味深い一文がある。かいつまんで言うと、「調査前は地理的にも特異な生活風俗が残存し、貴重な資料が得られることを期待していたが、祖納部落の葬墓制は沖縄本島と類似した伝承が多いのが意外であった。」というのである。その要因としてこの資料では、約 80 年前から新生活運動が徹底されてきたことをあげ、加えて、西表炭鉱で働く本土の人の影響で、必ず通夜を行うことや、ノーマ墓という仮墓を使うときに埋葬することなど、本土の習俗が 2、3 みられると記している。

また、祖納では 1957 年（昭和 32）に、祖納山の麓のマママ原に火葬場が設置された結果、従来の慣

1 竹富町地区別人口動態表 http://www.town.taketomi.lg.jp/town/index.php?content_id=40

2 琉球大学民俗研究クラブ 1969『沖縄民俗第 16 号 祖納部落・兼城部落報告』

習が簡素化される傾向にあるとも指摘している。以前は墓に風葬し洗骨改葬していたが、火葬になってからは、翌朝早く身内の者が骨箱に骨や灰を入れて墓で骨甕に移しかえて納骨するようになり、またナンカの供養も短縮するようになったという。

以上、この資料から祖納の葬墓制は、沖縄の中でも新生活運動の徹底や本土の人との接触による影響を受け、比較的早くに風葬から火葬へ切り替わり、簡素化されていたことがわかる。それでも、葬制については祖納に伝わる儀礼の数々が詳細に報告されている(表1)。また、集落の人々の相互扶助のもとで死者を送っていたことも記されている。

琉球大学の民俗研究クラブの調査の後、1970年に沖縄大学沖縄学生文化協会が同じく祖納での民俗調

査を行い、『郷土』第8号³で報告している。この2つの資料にみられる葬制に関する項目を列挙してみると、内容に若干の違いがある(表1)。これは調査した家や話者によるものかは不明だが、いずれの資料も1970年頃の祖納の葬墓制を伝える貴重な資料であるので、これを参考にして論を進めたい。

さて、これらの調査から45年を経た現在、他の地域では風葬から火葬への転換とともに葬儀の一切を専門業者に任せるのが一般的になった。その結果、かつて地域の人々が共同して行っていた葬送儀礼がみられなくなった。これに対し、祖納では比較的早くから火葬に変わったにもかかわらず、現在でも45年前と同じように集落が主体となって村人総出で葬式や野辺送りを行っている。そこで、次章からは現在の葬墓制について聞き取り調査等の結果を報告する。

表1. 祖納の葬送儀礼についての記録内容(一部抜粋し、表に編集し直した)

	琉大『沖縄民俗』第16号	沖大『郷土』第8号
死の予兆	・雄鶏が鳴く。 ・鳥が御獄の上で群がって騒ぐ。 ・犬や猫が変わった鳴き方をする。 ・夜鳥(ユーガラス)が群れをくんで鳴く。 ・人魂が病人のいる家から出る。 ・夜、大工の音等が聞こえる。 ・奥歯の抜ける夢や前歯の抜ける夢。 ・アオバト、キンバト、コッカル等の野鳥が家に入ってくる。	・猫やネズミが香炉の周りで騒ぐ。 ・犬が遠吠えする。 ・夕方カラスが群れをくんで鳴く。 ・火魂がその屋敷から墓まで飛ぶ。 ・夜中に白を引く音、カンナやノコギリを引く音が聞こえる。 ・蛇や鳩、ゴッカラ(赤鳥)が家に入ってくる。
死の確認	・臨終の呼称: シニミヤン、マラシーなど。 ・脈が止まる、水が喉から落ちない、目の動きが止まったときをもって臨終とした。	・臨終の呼称: シニヤン、マラショウリヤン(目上の人) ・長男、家族、親戚、知人等の順に脈拍、呼吸、爪色などを調べて確認。
死の通知	・部落内は口伝え、部落街は2人が伝えた。 ・現在は貼り紙で通知。	・家族、親戚が部落民に触れ回ったり、掲示板に告示。
沐浴 (湯灌)	・アムス、ミズアムスという。 ・日常使用している井戸水、水道水を使用。 ・沐浴の前に3回死者のワラビナー(童名)を呼び、反応がないのを確かめた。 ・裏座の畳と取り外して簀を敷き、逆水と糠袋を使って沐浴させた。 ・沐浴後は紙を敷いて竈の灰をまく。	・ミチアムシという。 ・日常使用している井戸水、水道水を使用。 ・肉親が裏座で行う。 ・逆水を作り、死者のワラビナー(童名)を3回呼んだ後、顔から順に拭いた。 ・沐浴後は二番座に移し、沐浴させた場所は竈の灰をまき簀で囲む。

3 沖縄大学沖縄学生文化協会1970『郷土第8号』

死装束	・以前は5枚、火葬になってからは3枚。 ・一番下に白衣、その上に晴れ着、その上から白い着物を裏返しにして着せる。 ・衿元に数本の針をさす。 ・副葬品：種物や日用品、髭や爪、髪等。	・以前は、夏は夏服、冬は冬服を奇数枚（3枚か5枚）着せ、その上から白衣装（チョウキヌ）を着せたが、現在は肌着にチョウキヌを着せるだけ。 ・襟元に3本針をさす。 ・副葬品：種物や爪を布に包んで入れる。
死者の位置	・二番座の畳の四隅を合わせて敷き替え、仏壇の下座の方向に頭を向けて寝かせる。	・畳の四つ角が合うように直し、仏壇の前に西向きにして寝かせる。 ・死者の膝を曲げ、縄で縛り固定させる。
供え物	御飯、果物、酒、サトウキビ、細長い餅、花（図あり省略）	青果物、細長いダンゴ、キビ3本を束ねたもの一対、御飯（普通は白米、61歳以上は赤飯）、アオサのお汁、おかず、塩
通夜	・ピマチ、アウシといい、必ず行う。 ・親戚や友人が喪家に集まり一晩を明かす。 ・死者を二番座に寝かし、部落共有の黒幕で取りまき、その中で身内や親戚が死者を囲み、一晩中線香をともし続ける。	・夜伽ぎ＝ユドマリという。 ・喪家では戸を全部開け、親戚、知人が集まってわずかな酒を飲みながら一夜を明かす。 ・夜が明けると部屋の四方に部落共有の黒幕を張る。
入棺	・二番座で嫁が炊いた御飯を親戚と一緒に食べ、別れの盃をかわす。 ・死者の足を曲げて棺に入れる。 ・黒幕を外し棺を一番座に移して告別式を行う。	・黒幕を外し、死者を床の間に移す。長男が言葉を言い、死者の口元に酒を落として自分も飲み、最後の別れをする。 ・家族や親戚の男達が入棺する。 ・煙草、煙管、鏡や櫛等の副葬品も入れる。
野辺送り	・部屋の戸を全部取り外し、横倒しにする。 ・喪家からヒンプンをアンター廻りで出る。 ・潮の干満関係なく、午後3時頃行う。 ・入棺時は、頭を先に入れ、墓に向かう途中は足が先になり、墓への納棺時は頭を先に入れる。	・部落共有の葬具（龕、ティンガイ、旗）をガンヤーから持ってくる。 ・喪家では龕の担ぎ手にタオルを渡す。 ・部屋の戸を全部取り外し、横倒しにする。 ・葬列の通る道沿いの家は、厄払いのためカブリキやダイドウ（竹）を門前に置く。
葬列の順序	たいまつ、燈炬、弔旗（四旗）、名旗、花輪、提灯、ゲタ、傘、香炉（死者が生前使用した食器を利用）、白位牌（喪主が持つ、傘をさす）、天蓋、龕、家族・親戚、一般会葬者	たいまつ（ピンドー）、天蓋、旗、造花（部落の夫人が色紙で作り、芭蕉の茎にさして子ども達が持つ）、龕、位牌（長男が持つ）、家族・親戚、一般会葬者
納棺	・墓には男1人と老女3人が先に行き、墓に入ることを告げて墓口を開ける。	・龕を担いだ男が墓を開け、アダン葉で厄払いしながら棺を死者の足元の方から入れる。 ・棺の上に位牌と膳、茶碗、カンピンを乗せる。 ・墓を閉じたあと、墓前に傘、杖、造花、旗、提灯、ご馳走を供える。
悪霊祓い	・浜で2、3回体に潮水をかけて身を清める。 ・家では門に横たえたカブリキに塩をまく。 ・喪家の者は横倒しした戸に3回小石を投げてから家に入る。 ・夜、喪家で男3人が風呂敷でほおかむりして、ヒルギ貝を家ながら、二番座と一番座の周囲をホー、ホーと唱えながら3回廻る。近くの浜で悪霊を追い払い、ヒルギ貝とカブリキを捨て、浜で身を清めて各家に帰る。	・帰りは浜に作ったラドー（竹）のアーチ型門をくぐり、海に入って手足を洗う。 ・参列者は海から家に帰る時、豚小屋や便所等に立ち寄って家に入る。

3 現在の祖納の葬制

今回筆者が行った祖納での調査は、専ら石垣金星氏(昭和21年生)のご協力によるものである。調査は、2014年11月27日と2015年2月18日に同氏の工房で聞き取りを行い、また同氏の案内で集落内の墓地や龕屋、火葬場、古集落の跡地等を見て回った。

石垣氏は、祖納集落の元公民館長で、祖納だけでなく西表島全体の歴史や文化等に精通する方である。館長時代、集落内の拝所や火葬場、龕屋などの建築改修に尽力され、また龕の修理や塗装塗り替え等も自ら行ったそうである。葬儀の時にはいつも中心的な役割を果たされている。今回は貴重なお話を伺うとともに、多数の写真資料を提供していただいたので、特別展ではこれを基に「西表島祖納の野辺送り」と題した映像を製作し展示した。ここでは、石垣氏からお聞きした内容を紹介する。

(1) 死の予兆

石垣氏はこれまで部落から死者が出る前に、次のような葬式の知らせを経験している。

・コノハズクが夜、猫みたいにミャオミャオと鳴いて、

追い払っても出て行かないとき。

・夜中に目の前から満月くらい大きな火の玉が現れて、「まるまぼんさん」の方向に飛んでいったのを見たとき。

・ある葬儀でお婆さんを火葬して帰ってきたら、お爺さんの仏壇にアカショウビンが入ってきて位牌に向かって頭を下げたあいつづいていた。亡くなったお婆さんが会いに来たと思ったとのこと。

(2) 通夜と告別式の準備

喪家の仏壇前に祭壇をつくり花を飾る。通夜は基本的に身内だけで行うが、この間に村の人達は手分けして翌日の告別式の準備をする。若者は竹や薪の切り出し作業や花台を作る。棺桶がない場合は大工の人がこれを作る。棺桶は今は石垣島で注文するが、市販のものは長いので切断して短くする。大きさは4尺4寸4部である。

また、年寄りは紙花を作り、婦人たちは賄いを作るなど、それぞれに役割が決まっている。龕に立てる小旗などの文字は石垣氏が自ら墨で書く。弔旗や名旗も準備される。

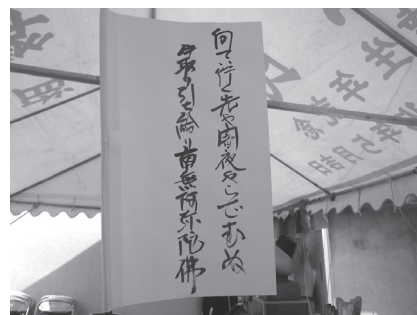


写真1. 葬儀の準備風景(左から花台作り、紙花作り、龕に立てる小旗) 石垣金星氏提供

(3) 葬儀

葬儀は公民館が主催で行う。死者がカジマヤー(満88歳)以上の高齢者や神司の場合は、告別式の朝に旗頭を立てる。また、朝、龕屋から龕を運び出して組み立てる。弔旗や銘旗を竹にくくりつけ、龕には小旗をさす。葬式や告別式の詳細は聞いていない。

(4) 野辺送り

告別式が終わると死者を入れた棺桶を龕の中に納める。喪家から火葬場まで龕を運ぶ。龕は8名で担ぎ、普通火葬場まで絶対に降ろしてはいけないとのこ

と。非常に重いので若者でないと持てない。

野辺送りの順序は、松明(ビンドウ)を持った若者が先導し、燈炉(トウル)、弔旗、名旗が続く。名旗は故人の名前を記したもので、公民館が1本500円で提供したり、親しい人は個人で準備する。多いときには100本出ることもあるという。晒しの布に死者の俗名を書き竹に括り、参加者がそれぞれを持つ。弔旗、名旗の後に花(パナ)、香炉、位牌を持った喪主が続き、天蓋(ティンガイ又はゴーガー)、龕、その後に家族、親戚、一般会葬者の順となる。



写真 2. 野辺送りの風景（左から、出棺、葬列、火葬場へ到着）石垣金星氏提供

葬列は集落南東方向の真山（マヤマ）へと続く。葬列が通る道に面する家は、魔除けのために門前にカブラキ（イヌビワ）という植物を切ってきて置く。

西部診療所と龕屋があるところが、この世とあの世の境であるという。

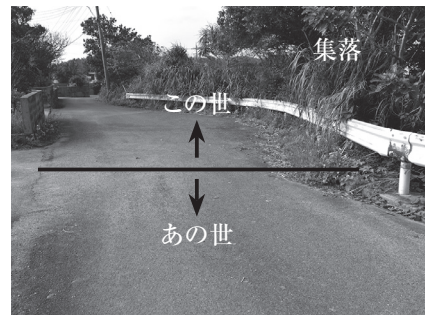


写真 3. カブラキ 石垣金星氏提供

写真 4. この世とあの世の境

通常、葬列には神司は参加しないが、神司が亡くなったときだけは他の神司が葬列に加わる。このとき、神司はラドー（ダンチク）という竹の杖をもち、クロツグをたすき掛けにして白衣装の袖から通して後で結ぶ。白衣装の裾をたくし上げて前で結ぶなど、独特の衣裳を身につける（図 1）。

いことは聞いていないが、亡くなった神司の家の方向に向かって拝むという。



図 1. 神司の衣裳（写真を参考に作成）



写真 5. 神司の葬儀（左から、旗頭を立てる、神司の葬列、シマミセの儀礼）石垣金星氏提供

一方、一般の人は火葬場まで龕を降ろしてはならない。火葬場でようやく龕を降ろし、遺体を木棺ごと窯に入れる。龕はその場で側面の板戸が取り外され畳まれる。火葬は青年会の若者たちが夜通し薪をくべて火の管理をする。翌朝までには火も落として冷やし、早朝6、7時頃には身内の者が来て骨を拾い、墓に納骨するそうである。

(5) 龕

祖納の龕は昭和5年7月31日に落成し、同年11月18日に保管家屋も落成した記録がある。石垣氏によると龕はおそらく首里から技術を伝えられた人が石垣にいて、祖納のものを作り、その後干立でも作った

であろうとのこと。現在西表島で残っている龕は、祖納と干立、それに後述する古見の3カ所である。祖納の龕の素材はチャーギ（イヌマキ）で、あと100年は持つだろうとのこと。漆が少し剥げていたが、3年前に石垣氏が自ら漆を塗り替えた。

祖納では、龕は逃げないようにロープで縛ってあるという。あるときそのままにしていたら龕が勝手に動きだし夜中からガタガタと部落を歩いていたので、それからはロープで固定するようになったそうである。龕ゴウ祭など、本島南部地域で盛んな龕の年忌祭は、祖納では全く行われず、野辺送りを使うとき以外は龕屋も開けることはないという。



写真 6. 龕と龕屋（左から、龕屋、龕の収納風景、龕の組立て）右写真：石垣金星氏提供

(6)『萬集』

祖納集落の葬式のマニュアル。アラキヤ（屋号新城屋、西表家所有）に残されている。『萬集』は、ムラで葬式を出すときには真っ先に活用される文書である。内容は、弔旗に記された文字（石垣氏は般若心経の幟と言っていた）、種物入袋の字、棺に被せる布に書く文字、龕に立てる小旗の文字、死者の顔を被う経文、かふ之人、生水死水、供引の方、位牌や弔旗の文字数書き方、死人送時、日供引の方、葬送順序、服忌期間があり、最期に龕を新調したときの記録と真山火葬場整備事業の記録も掲載されている。

『沖縄民俗』第16号によると、薩摩支配の頃、西表家の先祖が薩摩へ上る途中で遭難し支那にへ流された。そのときの土産として葬式一般のことを記した萬集と葬式旗を持ち帰ったとの謂われがある。祖納では今でも葬式の時には全て『萬集』に従って行い、内容の解釈については石垣氏が古老から習って今も伝えているという。

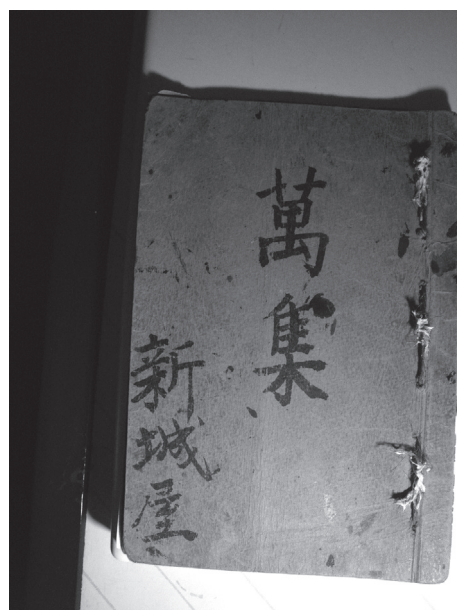


写真 7. 『萬集』 石垣金星氏提供

(7) 火葬場

祖納の火葬場は、先述のとおり 1957 年に建設された。地元の老人会、通称「温故会」が建設したもので、温故会会員や住民の寄付によって完成している。建設当時のことが記されている碑の内容には、次のように記されている。

「人は生まれ人は死ぬ」それは不測の天命でありその運命の中で「生を育み死を葬る」それは古今に通ずる人間の美徳である。吾々は 1956 年 9 月 19 日（旧十三夜）の決議に基づいて総工事経費 22,990 円会員 1 人 350 円一般寄付 12,790 円及び労力奉仕（会員延 173 人部落民 180 人計 353 人）によってここに完成した。本会設立五十周年記念として、この事業によって今後葬儀はてい重に行った祖先伝来の美風が末永く保たれる事を念ずる次第である。

1957 年 9 月 21 吉日建立 祖納温故会 2007 年 9 月 21 吉日新調建立 祖納公民館」

次に、最初の火葬場建設から 50 年が経った 2007 年に「真山火葬場整備事業」を立ち上げ、火葬場の修理や屋根の葺替え工事等を行っている。その内容

は、次のとおりである。

「1957 年火葬場を建設し此处から天国へ旅立った先人達は遺言を建設祈念碑に記録して私共へその想いを託されました。それから 50 年が経ち、祈念碑の文字も消えかけ、火葬場の傷みも著しく早急に整備を必要とされる事から 2007 年 3 月 31 日定期総会に於いて真山火葬場整備事業計画を決議し事業に着手した。整備費として一般募金を祖納 70 人 396,000 円干立 22 人 95,000 円他地区 110,000 円東京西表郷友会 24 人 102,000 円在沖西表郷友会 53 人 346,000 円、石垣在西表郷友会 30 人 65,000 円、総人数 209 人計 1,109,500 円竹富町役場補助 1,000,000 円公民館負担 2,142,228 円、総計 4,251,728 円、工事人夫延べ 154 人公民館役員奉仕 30 日よりトタン屋根から板葺き屋根に葺替え駐車場拡張、祈念碑は大理石に刻み平成 21 年 3 月 12 日落成した。今後共に先人が残したこの美風を島がある迄いついつまでも受け継いでいく事を切に願うものである。

2009 年 3 月 12 日丑年 期成会長 東浜孫助
祖納公民館長 石垣金星」



写真 8. 火葬場（左から、改修前、改修工事、現在）左と中央写真：石垣金星氏提供

以上みるように、祖納の火葬場は住民たちが自ら資金を集めて建設して利用し、2009 年の改修工事では祖納の住民のみならず郷友会や他集落からも募金や労働力を提供してもらいながら実現し、今も大切に維持管理されている。最近、八重山病院で療養して向こうで亡くなり火葬されてくるケースが多いそうだが、島の西部で亡くなった場合は火葬場を使うことが

ある。火の管理は祖納以外の人はできないので、部落外の人は薪の採取や掃除等を手伝うそうで、4、5 年に 1 回使っているとのことであった。この火葬場について語られる石垣氏からは、死者を丁重に茶毘に伏し、村人みんなで送るという祖納の慣行に誇りをもち、これからも守り続けていこうという確固たる意志を感じることができた。

4 祖納の墓制

(1) 墓地

祖納の墓地は、集落北側の学校近くと南東側のマヤマ原にある(図2)。祖納公民館が共同墓地に指定している部落の共有地。『沖縄民俗』第16号によると、墓は個人墓がほとんどで、慶来慶田城の塔式墓だけが門中墓の形態を有しているという。

石垣氏の話では、これまで墓地の使用料は無料だったが、今後は一坪まで年間千円を集め、何十年間に1回火葬場の改修工事に使うとのこと。マヤマ原には、比較的新しい破風墓や塔式墓などがあり、近年はここに墓を建てる人が増えているという。

ちなみに、竹富町の墓地等の現況調査[2014]⁴によると、祖納の墳墓数は74基(主墳墓66基、小墳墓8基)で、主墳墓のうち54基が平地式家型墓、12基が横穴式の洞穴墓または掘込墓である。また墳墓の素材は48基(72.7%)がコンクリート製で、現地地盤を利用した墓が8基(12%)、その他琉球石灰岩や御影石となっている。おそらく、マヤマ原の墓のほとんどが

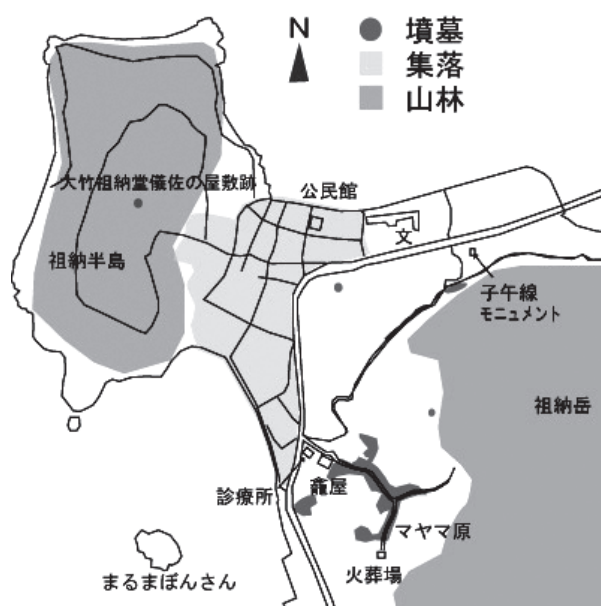


図2. 祖納集落の墓地等の略図

コンクリート製や御影石製の平地式家型墓であろう。



写真9. 現在のマヤマ原の墳墓の例



(2) 古墓

マヤマ原の一角に、現在は使われていない山石を積み上げた墓が残っている。石は大きさも厚みもある

巨石で、元々慶来慶田城の墓で今は遺骨を移して新しい墓に移転したとのこと。このような巨石の積石墓は古い時代のものだという。



写真10. マヤマ原の巨大な山石を積み上げた石積墓

4 竹富町自然環境課 2014「竹富町墓地基本計画策定に伴う地域説明会資料」より

また、集落北側の学校の近くにある墓地は、自然な砂岩状の崖を掘り込んだ墓であり、このタイプは明治時代初期のもので比較的古いという。石垣氏の家の墓も掘込墓で、入口は木棺がすっぽり入る程の間口であるが、墓室内は3畳程あって広いという。中には4畳半ほどある所もある。石垣氏の墓も内部にはパナリ焼の厨子があるとのこと。

この掘込墓の墓口を塞いでいる石には、通気口の

穴があいている。この辺の砂岩はとても柔らかく加工しやすいそうである。したがって、厚みのある石だが四角や三日月型にきれいに切りとられている。よく墓口は漆喰を塗るなどして完全に遮断する例が多いのに対し、ここではあえて穴を作って墓室の内と外をつなげている点で興味深い。石垣氏によると、通気性を良くして遺体を早く骨化させるためではないかとのことであった。



写真 11. 集落北側の墓地（左から、付近遠景、掘込墓 2 例、墓口の通気口）

(3) 大竹祖納堂の住居跡の石積墓

祖納集落の南側の丘陵地（上村）に、祖納村建ての祖とされる大竹祖納堂儀佐（オオタケソノドウギサ）を祀っている御嶽がある。そこは鍛冶の技術を伝えたといわれる大竹祖納堂の住居跡で、その一角に姉

妹（ブナリ）の墓と言われるテーブルサンゴを円形に積み上げた、通称「チンマサ」の墓がある（写真 12 左）。またその横には兄弟の墓と言われる巨石で囲った石積墓も数基みられる。このような墓は、14 世紀までには造られたものと考えられる。



写真 12. 大竹祖納堂の墓（左から、テーブルサンゴの石積墓、中・右：方形の石積墓）

(4) 蔵骨器

現在の蔵骨器は市販の白い小さな壺が使われているが、火葬以前は、古くはパナリ焼の壺を転用して使い、その後は壺屋焼を石垣から買ってきて使ったそうである。納骨した遺体は、3 年経ったら墓から取り出して骨壺に移し替え、側の方に寄せたという。

5 まとめ

最後に、石垣氏の話等これまでの記述を整理し、

祖納の葬墓制について考察を加えたい。

① 葬送の主体

祖納での葬送は、現在も公民館を中心に村人総出で行っている。葬儀の時は、青年達が薪や竹の切り出し、龕の準備、大工が棺造り、老人達が紙花作り、婦人達が台所仕事というように、それぞれに役割があり、相互扶助のもとで執り行われる。これについて、琉大の報告⁵では「葬式の日には部落民は仕事を休み、班が中心になって喪家の手伝いをする。男は墓の掃

5 琉球大学民俗研究クラブ 1969『沖縄民俗第 16 号』p86

除、薪拾い、棺造り、龕持ち、花造り、火葬などをし、女は台所仕事を手伝う」とあるので、1969年当時から変わらずに行われてきた慣行だとわかる。

②『萬集』と葬送儀礼

祖納の葬送儀礼は、西表家所蔵の『萬集』に準じて行われている。葬式や野辺送りで行われる葬式旗や副葬品、葬具等も『萬集』に記された通りに準備するそうである。また、野辺送りの葬列の順序も、松明、燈炉、弔旗、名旗、花輪、香炉、位牌（喪主）、天蓋、龕、家族、親戚、一般会葬者の順で、46年前の琉大の報告⁶からほぼ変わっていない。

参考までに、1736年に蔡文溥が中国の「朱子家礼」を基本にして著した『四本堂家礼』の葬列の内容と付き合わせてみた⁷。すると、『四本堂家礼』では、松明、燈炉、白旗（四流旗）、長老（引導僧）、位牌と長柄の笠持ち、子孫一門、天蓋、龕、一門の婦女子、親戚、杖、張笠、立笠、木履・草履、拝敷筵・担荷一荷、角手洗、念仏の順になっている。これは久米村に伝わる葬礼の手引書であるので僧侶や念仏が加わっているが、それ以外は共通する点が多いように思われる。今後、他の項目も照合して2つの文書の共通点などを調べていきたい。

③火葬と洗骨

祖納では、火葬場ができる以前は風葬し洗骨していたという。琉大の報告⁸によると、墓に納めた後3年、5年、7年目で洗骨し、骨ガメに入れた。古くなると墓の奥のイケに合葬してカメを捨てた。昔は古い骨を集めて焼いたこともあったとある。また、死者が重なったときは、墓庭の側に仮墓を造るか、畑や土手に穴を掘って埋め、洗骨後に本墓に移したという。これからすると風葬していた時代にも、状況によって骨を焼いたり、土葬していたことがわかる。また、火葬後は洗骨改葬は行わなくなったと思われる。

④祖納の墳墓の形態

祖納のマヤマ原の墓地には、破風墓や塔式墓等の

比較的新しい墓がみられるが、学校の近くの古墓群は掘込墓である。この他にも古い墓として山石やテーブルサンゴを積み上げた石積墓を確認することができる。琉大の報告⁹では、祖納には洞穴墓は一つもみられず、全て人工的に造られた墓であることや、ノーヤ墓と称する古い墓にも変遷がみられる等の特異性を見いだしている。一方、沖大の報告¹⁰では、「洞穴墓は海岸近くに点在し、前面を野石で積み上げて造られ、他島からの人やマラリヤで死亡した人を葬ったと伝えられる」とある。また、ノーヤ墓については、砂岩や珊瑚石灰岩で積み重ね天井を板状大石で覆った形態の墓で、最も古い形は棺桶が入る程度の穴を地面に掘り、そこに棺桶を収めたら土を被せて埋葬しカヤで屋根を葺いたもの、新しい形は埋葬した周囲を野石で積み上げて天井をカヤや石で覆ったものとの記述がある。

筆者が今回確認した古墓には洞穴墓はなく、岩盤をくり抜いた掘込墓とテーブルサンゴを積み上げた「チンマサ」の墓、及び巨大な山石を切り出して造った横穴式の石積墓がある。石積墓がノーヤ墓だとは言及できないが、今回西表島古見の調査でも石灰岩の巨石を積み上げた方形の墓等について話を聞くことができ、また黒島や竹富島でも石積墓の実物や話を聞いたので、今後さらに事例を集めて形態や用途について検証していきたい。

おわりに

今回の調査を通して、西表島祖納の葬送は集落の人々の結びつきの上に成り立っていることを強く感じた。また、祖納では葬送儀礼自体は昔ながらの慣習を守り続けながらも、村人総意の上で自ら資金を出し合って火葬場を建設するなどリベラルな面も持ち合わせている。火葬への移行は、琉大の報告に見るように多少は儀礼の簡素化に結びついていると思われるが、一方では現在も集落の人々が協力し合って葬儀を

6 琉球大学民俗研究クラブ 1969『沖縄民俗第16号』p34

7 上江洲敏夫 1984「『四本堂家礼』と沖縄民俗－葬礼・喪礼について－」『民俗学研究所紀要第8集』成城大学民俗学研究所 p53-55

8 琉球大学民俗研究クラブ 1969『沖縄民俗第16号』p35

9 同上 p40

10 沖縄大学沖縄学生文化協会 1970『郷土第8号』p157

行い、死者を龕に乗せて村中の人が野辺送りに参加するという伝統を貫いている。ここには葬儀社などを介さず、祖納独自の慣習を守りながら村人がみんなで死者を弔うという本来あるべき葬送儀礼を見ることができる。ほとんどの地域で葬儀を業者が代行し地域住民が自ら行う所が少なくなった現在において、祖納の事例は非常に貴重であるといえる。

ところで、特別展「琉球弧の葬墓制－風とサンゴの弔い－」では、先史時代から現代までの葬墓制を時系列的に整理して展示を構成した。そのうち「第3章 今に伝わる葬具と葬送儀礼」のコーナーで、今回製作した「西表島祖納の野辺送り」の映像を上映した。この章は、主に地域の人々が共同で葬儀を行い死者を龕に乗せて運ぶという、かつて沖縄のどこの地域でも行っていた葬送儀礼を紹介するコーナーである。こうした儀礼がほとんど途絶えた中、現在でも地域の人々の手で執行される葬儀や野辺送りの事例として西表島祖納と与那国島祖納の事例を取りあげたところ、多くの観覧者の関心を集め、とくに年配の方からはご自分の体験談を交えた声が多数寄せられた。

展示を通して最も感じたことは、現代の葬送儀礼が業者任せになったことによって、本来の儀礼の意味や役割などを理解する機会がなくなりつつあることである。今回、いろいろな所で貴重な話を収集するうちに、かつて洗骨改葬をしていた頃の死者への思いや、家族、親族だけでなく地域の人々が一緒になって死者を送る文化に、沖縄の死生観を見るような気がした。

しかしながら、昨今の葬送儀礼は画一化され、簡素化されていく一方である。このような流れが果たして祖先を敬い祀ってきた沖縄の死生観になじむのだろうか。はなはだ疑問ではあるが、今日のグローバル社会においては時代の潮流にのって葬墓制文化も変容していつているのは否定できない事実である。洗骨改葬を伴う風葬や土葬の文化が半世紀の間にほとんど廃れてしまい、地域の人々が助け合って死者を送る地

域も少なくなった時代だからこそ、残された事例を掘り起こし記録に留める必要があると感じている。

謝辞

本報告は、竹富町祖納の石垣金星氏、昭子氏ご夫妻の多大なご協力をいただいて作成することができました。とくに、石垣金星氏には貴重なお話をご教示いただき、現地で墳墓や遺跡等の案内や資料の提供、及び映像資料の編集にもご協力をいただきました。また、調査のテープ起こし等では、比嘉香織氏にご協力いただきました。ここに記して心より感謝申し上げます。

参考文献

- 竹富町地区別人口動態表 http://www.town.taketomi.lg.jp/town/index.php?content_id=40
- 祖納（竹富町） ウィキペディア [ja.wikipedia.org/wiki/祖納_\(竹富町\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/祖納_(竹富町))
- 石垣金星 1991「文献からみた祖納の歴史－上村遺跡を中心として－」沖縄県教育委員会『西表島上村遺跡－重要遺跡確認調査報告－ 沖縄県文化財調査報告書 第98集』
- 琉球大学民俗研究クラブ 1969『沖縄民俗 第16号 祖納部落・兼城部落報告』
- 沖縄大学沖縄学生文化協会 1970『郷土 第8号』
- 沖縄県教育委員会 1980『沖縄県文化財調査報告書 第29集 竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書－』
- 竹富町自然環境課 2015『竹富町墓地基本計画』竹富町
- 竹富町自然環境課 2014「竹富町墓地基本計画策定に伴う地域説明会資料」竹富町
- 上江洲敏夫 1984「『四本堂家礼』と沖縄民俗－葬礼・喪礼について－」『民俗学研究所 紀要 第8集』成城大学民俗学研究所

